

* 塔望遠鏡分光器のカメラレンズをプレミアムに搬入

2008年10月20日、大発見としてアーカイブ室新聞76号で報じたフランス製のプラン子午儀をプレミアムに搬入した際、同じ基線倉庫にあった塔望遠鏡(太陽分光写真儀室)の分光器のカメラレンズ(写真1)もPMCのプレミアムに搬入した。これは何とか一人で運べるのではないかと思い、試みたが3人力が必要であったので、プラン子午儀の搬入時に野球部の仲間の力を借りた。助っ人として働いてくれた面々は木挽、今西、中島、和泉、大須賀、松井の6人であった。

この塔望遠鏡の分光器のカメラレンズは、筆者本人が東京天文台恒星分類部にいた頃、旧分光(本館Ⅱ)の大部屋を片付ける際、塔望遠鏡から基線倉庫に運び込んだものだから、所在を知っていたものである。当時、近藤、西村、成相、中桐の面々で運んだ記憶がある。塔望遠鏡が使われなくなり、半地下の分光器室は湿気がひどいので光学素子を置いておくことは適当でないと判断し、基線倉庫に運んだ。このとき、旧分光の大部屋は学会事務所に明け渡すべく片付けたものであった。そのため旧分光大部屋にあった金属製の棚なども移設した。旧分光のものを大量に持ち込んだものがまだそのままになっている。そのとき塔望遠鏡から持って行ったものは、この重いカメラレンズだけだったと記憶している。旧分光から運んだ大物はリーズのマイクロフォトメーターであり、これはまだ基線倉庫にある。これもぜひプレミアムに移設したいと思っている。他にも65cm屈折望遠鏡で使った分光器も基線倉庫に置かれている。



写真1 塔望遠鏡分光器カメラレンズ

筆者は、昭和 41 年（1966 年）4 月に岡山天体物理観測所から三鷹に転勤でやってきた。三鷹に来て最初に担当したのが、この塔望遠鏡であった。当時、この望遠鏡を主に使っていたのは、後に京都大学に行かれた牧田さんであった。

当時、塔望遠鏡の制御盤はツアイスが納入した大理石の配電盤であったが、ドイツ製の特殊なヒューズなどが使われており、切れたヒューズの交換部品がなく既に望遠鏡駆動ができない状態であった。そこで、三鷹にやってきた筆者が、秋葉原で電気部品を調達し、配電盤を作り直し、制御盤をすっかり作り直して望遠鏡を再び稼働させたのであった。大理石の配電盤は細工がしにくいので、木製の配電盤にするため、当時は天文台に常駐していた大工さんに配電盤の板を作ってもらい、ヒューズの入ったナイフスイッチに交換してしまった。当時の大理石の配電盤はツアイスのヒューズ類が着いた状態でタワー地下にまだ立てかけられている。

このような作業をする筆者を見た末元先生が、当時、岡山天体物理観測所に建設を進めようとしていた太陽クーデのために、三鷹の塔望遠鏡で太陽観測の勉強をしていると納得したのを覚えている。写真 2 が当時の塔望遠鏡の建物である。



写真 2 当時の塔望遠鏡の建物

観測のため周囲の樹木は塔のベランダより低く切ってあった。ベランダに立つと 26 インチ望遠鏡のドームの丸屋根は全て見えたし、北研究棟の屋上あたりも見えていた。牧田さんから木が伸びてきたら切り払うようにと言われていたが、塔望遠鏡は岡山に 65cm 太陽クーデ望遠鏡ができ役目を終えたので、その後樹木を切り払った覚えはない。

運転ができるようになった塔望遠鏡では、守山さん、日江井さん、平山淳さんなどが暫

く観測に使用し、色収差に合わせ、複雑な曲線状に曲げた長いフィルムホルダーを使って太陽のカラースペクトルを撮影するのを手伝った覚えがある。その複雑に曲がったフィルムホルダーは、まだ半地下の分光器室のピアの上に残っている。今は塔望遠鏡の半地下室を初め、建物全体が兵どもの夢のあとである。写真 3 が塔の上のドームに収まったシーロスタットである。このドームが朽ち果てる前に何とか手を打たねばと思っている。

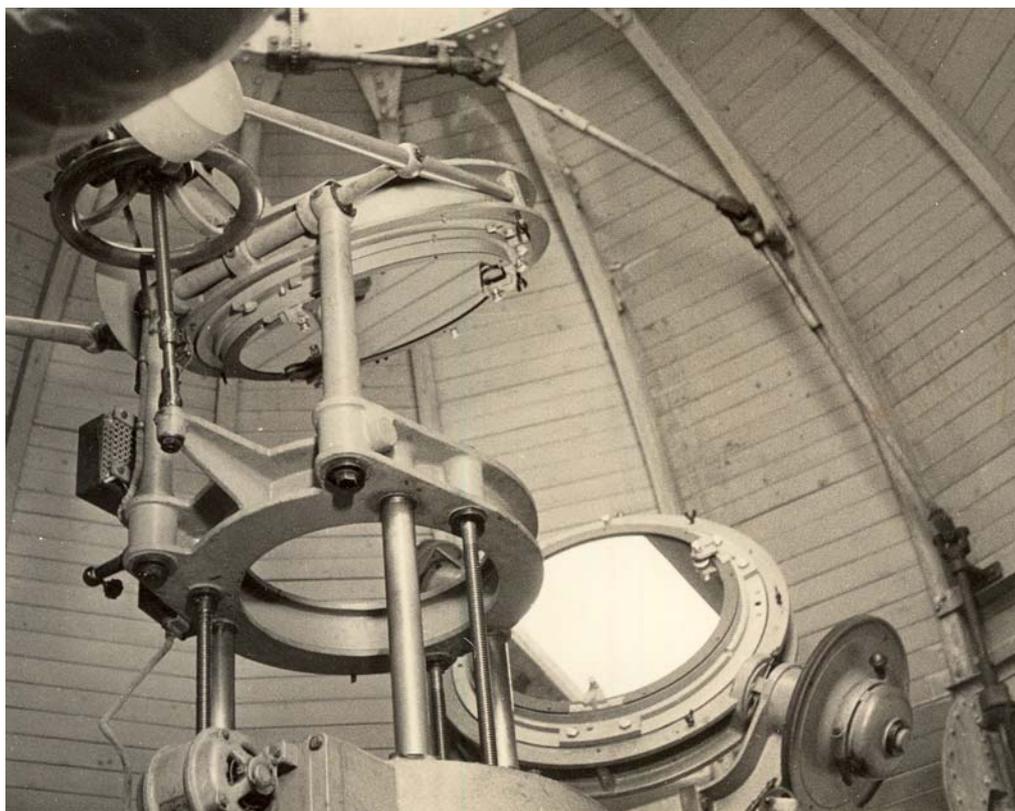


写真 3 塔望遠鏡のシーロスタット

写真 4 は、魚眼レンズで撮ったタワーの写真である。



写真 4 タワー（当時はそう呼んでいたのです）